

■学校経営のポイント

「～していいですか」と言わせない

喜名 朝博

「先生、トイレ！」「先生はトイレじゃないよ」「先生、トイレに行っていていいですか」「『行ってきます』でいいんだよ」担任時代、こんなやり取りを何回しただろう。今、さすがに大学の講義で「トイレに行っていていいですか」と言う学生はいないが、「トイレに行ってきます」と断って行く学生は多い。それがルールであり、礼儀であるという学校文化を身につけているように見える。

申告できない子もいるはず

しかし、トイレに行くという生理的欲求にすら許可を与えてきた学校とは何なのだろうと考えてしまう。トイレに行かせないことは体罰であり、ダメとは言えない。それでも「休み時間に行っておきなさい」と嫌みを言う教師もいる。人の生理的欲求まで管理しようとすることは人権に関わる。

教師としては、許可しているつもりはなく、ルールとして申告させているつもりなのだろう。しかし、「～していいですか」と言わせることで、何でも教師に許可を得ることを学習させている。教師に言えなくて、ずっと我慢している子がいるかもしれない。

授業中のタイムアウト

そもそも、クラスメイトの前で「トイレに行ってきます」などと言わせる必要はない。管理監督責任や安全配慮義務を負う教師にとっては、誰がどこに行ったのかを把握し、戻ってきたことを確認さえできればそれで済むことだ。ならば、スポーツのタイムアウトのサインのように、手でTの形を作って教師に合図を送り、黙って行けばいい。授業も止まらないし、水分補給や外の空気を吸いたいというときにも使える。

指示待ちにしていないか

授業中、自分の課題や作業が終わると「先生、先に進んでいいですか」と、いちいち許可を求めるクラ

スがある。勝手に先に進んで教師にとがめられた経験がそうさせるのだろう。

学校は子どもたちの主体性が足りないと言う。しかし、子どもたちの主体性を奪っているのは、実は学校なのではないか。時間や行動、言葉や感情までもが管理されると、自分で考えることを止め、誰かの指示を待つ子どもになってしまうのだ。

子どもたちを信じる

当たり前のように継承してきた学校文化もアップデートが必要だ。学級の秩序を形成するために自由を制限するという教師視点の発想を止め、自由の中で子どもたちが考えながら共に秩序を築いていくという発想の転換を図っていきたい。さらに、主体性とは、単に「自分で決めること・判断すること」ではない。自分の判断が尊重される経験の積み重ねによって確かなものになっていくのだ。その意味でも、子どもたちの声を聞き、もっと信じて任せていきたい。

「～していいですか」ではなく、「～します」と自信をもって言える子を増やしていきたい。

主体的・対話的な学びの充実を

次期学習指導要領の基盤となる考え方の一つに「主体的・対話的で深い学びの実装」がある。深い学びが共有されていないという課題から来るものだが、その前提となる「主体的な学び・対話的な学び」はできているだろうか。教師のねらいを、子どもたちの「めあて」として押しつけていないだろうか。子どもたちの問題になっていないのに、解決を強いていないだろうか。話し合うことが目的化し、多様性の理解のみで終わっていないだろうか。

10月、今年度の折り返し地点にきた。子どもたちの主体性について改めて考えていこう。

(きな・ともひろ＝国士舘大学教授／全国連合小学校長会顧問)

徹底予測！

(10/29 発売)

次期学習指導要領はこう変わる。

【著】 吉田武大 (関西国際大学教育学部准教授)

本の詳細およびご予約は、右QRコードより小社ホームページをご利用ください。

